

# ふるさと 見て歩き

第88回

## 境松峠と塩の道

海から遠く離れた山間地に海産物を運ぶため、海辺と山間地を結ぶいわゆる「塩の道」と呼ばれる道が各地に残されています。新潟県と長野県を結ぶ千国街道や長野県と愛知県を結ぶ三州街道などが知られています。

本市にも、このような海へとつながる道が存在していました。

那珂川の南岸に広がる御前山地域上伊勢畑地区。栃木県茂木町との境界に位置する片倉山の山中に境松峠と呼ばれる峠があります。この峠の東側は、現在は三叉路になっていて、上伊勢畑地区、松山地区（御前山地域）から茂木町飯野に通じています。



▲片倉山



▲馬頭観音

この境松峠に、現在の常陸大宮市と日立市域の人々が共同で建てた石造馬頭観音像が安置されています。馬頭観音は、交通手段を牛馬に頼っていた時代、それらの供養のために建てられた石造物です。馬力神なども表記され、文字だけを石碑に刻んだものも見られます。また、石仏として像が刻まれているものは、忿怒相（怒りの形相）で頭上に馬頭を戴き、三面三目八臂（3面の顔、3つの目、8本の

手を有する像）や一面四臂、三面二臂などの像容で表されます。胸前で馬の口を模した「馬頭印」という印相を両手で示し、剣、斧、棒または、蓮華のつばみを持つ例もあります。



▲台座銘

境松峠にある馬頭観音は2基で、寛政10年（1798・写真右）と文化8年（1811・写真左）の年号が刻まれています。このうち、寛政10年の方は、石碑建立の願主として野口村（常陸大宮市）、久慈村、水木村、大沼村、河原子村、会瀬村、川尻村（日立市）といった村の名が石碑の台座に刻まれています。また、文化8年の方にも水木村、河原子村、会瀬村などの名があります。

日立市域の村々による石碑の建立は、この地が日立の海辺からの物資の輸送ルートであったことを想像させます。

境松峠の5km程南には城里町塩子と茂木町青梅を結ぶ金山峠があります。金山峠は、付近が鉾山だったことにその名が由来しています。海辺の大洗から水戸の南を通り、河和田、木葉下（共に水戸市）、茂木を通り宇都宮へ通じる塩の道の一部として知られています。塩の道沿いの茂木の宿には塩地蔵と呼ばれる石造の地蔵があり、願かけで人々が振りかけた塩のため像容が全くわからなくなる程に厚い信仰を得ていました。

境松峠も、同様に太平洋岸から内陸へ海産物がもたらされる道筋に当たっていたと考えることができます。

また境松峠は、古来より松の木が南北に植えられた景勝地で、常陸国と下野国（栃木県）の国境を示していたと伝えられています。その下野国側には、徳川光圀の「お手植えの松」があったと伝承されていますが、その松林は枯死してしまったということです。

常陸大宮市と日立市を結ぶ古道「塩の道」はどのような姿だったのでしょうか。

※参考文献：御前山村教育委員会編『ふるさと民俗』1989年、桑野正光『栃木の峠』随想舎2010年

歴史民俗資料館大宮館 ☎52-1450